

WWF in Numbers

733

白保のサンゴ礁面積 (733ha)

2000

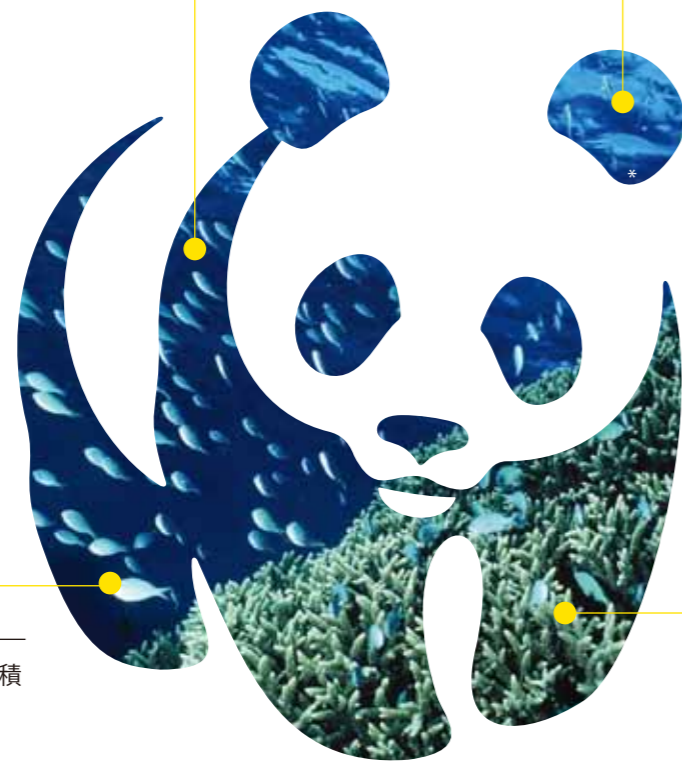
しらほサンゴ村オープン

41500

白保のアオサンゴ群集面積
(約41500㎡)

120+

白保にあるサンゴの種類数



私たちはWWFです
人と自然が調和して生きられる未来を目指して、地球環境の悪化をくい止めるさまざまな活動を実践しています。
www.wwf.or.jp

©1986 Panda Symbol WWF® "WWF" is a WWF Registered Trademark.

WWF ジャパン

石垣島白保地区でのサンゴ礁保全に資する持続可能な地域づくりプロジェクト

JPN

WWF.ORG.JP



WWF ジャパン
南西諸島生物多様性保全 CBM モデル

石垣島白保地区での サンゴ礁保全に資する 持続可能な地域づくり プロジェクト

—地域コミュニティとの連携・協働の記録—



しらほサンゴ村

目次

はじめに ～生物多様性の保全は、地域づくりから～	1
1.WWFジャパンと石垣島白保地区の関わり	2
WWFとは	
WWFサンゴ礁保護研究センター	
2.『白保持続可能な地域づくりプロジェクト』の基本的な考え方	3
多様な関心を持つ人々の参画を促すために	
白保地区での取り組みの方針	4
地域で目指した3つの仕組み	
中間支援組織としてのWWFの活動	5
目標とする地域のイメージ	
プロジェクトの進捗状況	6
3.白保集落の概要	7
4.サンゴ礁生態系とサンゴ礁文化	9
5.サンゴ礁保全の担い手は誰か？	10
6.持続可能な地域づくりに必要な役割	11
地域のカタリスト（触媒）	
レジデント型研究者としてのWWF	12
7.白保持続可能な地域づくりの「これまで」と「これから」	13
8.実践事例編 白保コミュニティによる活動の詳細	15
実践事例1：白保今昔展 / DVD作成（2004年）	16
実践事例2：白保村ゆらていく憲章の制定（2004～2006年）	17
実践事例2-1：白保学講座（2007～2010年）	19
実践事例2-2：ンマガミチ・カンヌミチの景観修復（2008～2013年）	21
実践事例3：白保魚湧く海保全協議会（2005年～現在）	23
実践事例3-1：サンゴ礁海面利用の自主ルール（2005年～現在）	25
実践事例3-2：伝統的定置漁具「海垣（インカチ）」の修復と活用（2006年～現在）	27
実践事例3-3：グリーンベルト大作戦（2007年～現在）	29
実践事例3-4：ギーラ（シャコガイ）の放流による資源増殖（2009～2010年）	31
実践事例3-5：地域住民の手による環境モニタリング体制の構築（2000年～現在）	33
実践事例3-6：世界海垣サミットの開催（2010年）	35

実践事例4：白保郷土料理研究会（2004～2005年）	37
実践事例5：白保日曜市の開催（2005年～現在）	39
実践事例6：しらほこどもクラブ（2006年～現在）、 ふるさとの海交流事業（2006～2010年）	41
実践事例7：沖縄大学との連携とやまぐうキャンプ（2010年～現在）	43
実践事例8：八重山の自然と暮らしの合同写真・ポスター展（2012～2016年）	45
実践事例9：NPO夏花の設立及び自立支援（2012年～現在）	47

おわりに	49
------	----



はじめに ～生物多様性の保全は、地域づくりから～

南西諸島の島々を巡ると、祭事や暮らしの中に、人と自然との関わりの深さを垣間見ることができます。長い歴史の中で先人たちが、自然の恵みを取り入れ、島ごとに築き上げた「暮らしの文化」の多様性もまた、保全・継承すべき生態系サービスのひとつだといえます。

WWFでは、1980年代より取り組んできた南西諸島での自然保護活動を通して、生物多様性の保全を進めるためには、これらの島々での人々の暮らしを大切にしていくことが重要であると感じるようになりました。現在、南西諸島で顕在化している自然環境の劣化、減少のいずれもが、人間活動と自然環境の軋轢によるものです。開発に伴う森林の伐採や沿岸の埋め立て、住宅や事業所、農地、畜舎などからの排水による水質の悪化、漁業や観光での過剰利用などは、狭小な島嶼域であるがゆえに影響が現れやすいものです。

WWFでは、2004年に石垣島白保地区において、地域コミュニティとの協働による「サンゴ礁保全に資する持続可能な地域づくりプロジェクト」をスタートしました。このプロジェクトは、WWFの考える南西諸島での生物多様性保全のモデルを具体化することを目的としたものです。現在、10年以上に及ぶ地域との協働が実を結び、白保コミュニティの有志が主体となったサンゴ礁の保全を通じた地域の活性化が定着しつつあります。

本冊子は、WWFと白保コミュニティの協働による石垣島白保地区での取り組みを記録するとともに、地域の主体的な保全活動を促進するためのポイントを整理したものです。資料の中で取り上げた活動はWWFの事業に加え、WWF職員が地域住民の一人として白保地区の活動に参加したのも含まれています。WWFの活動と地域の活動を併記することで、この間の地域でのダイナミックな動きに触れていただけるよう配慮しました。

南西諸島の地域づくりや地域自治に取り組む方々に手に取っていただくことで、豊かな自然と文化を継承する持続可能な地域づくりが促進することを期待しています。

2016年3月31日

WWFサンゴ礁保護研究センター
センター長 上村 真仁

1.WWF ジャパンと石垣島白保地区の関わり

WWF とは

WWF(World Wide Fund for Nature：世界自然保護基金)は人と自然が調和して生きられる未来を築くことをめざして活動する地球環境保全団体です。

WWFの活動は、1961年9月、絶滅のおそれのある野生生物を救うことからスタートしました。その後、野生生物が生きる上で必要とする、さまざまな自然環境、森や海、草原、湿地などの生態系の保全に活動の範囲を拡大。地球環境の保全をめざし、現在は気候変動を含めた多様な環境問題への取り組みを行なっています。

スイスのWWFインターナショナルを中心に、70カ国以上の国々に拠点を置き、100を超える国々で保全プロジェクトを展開しています。



■ WWFの各国事務所または活動拠点がある国
■ WWFの協力団体がある国
□ オフィスのない国
※協力団体とは、WWFとは別の団体ですが、WWFと同じ目標を掲げて活動しています



WWF サンゴ礁保護研究センター

1971年、世界で16番目のWWFとして東京で設立されたWWF ジャパンは、その設立当初から南西諸島の自然保護活動を行なってきました。白保サンゴ礁の埋め立てによる新石垣空港の建設に対して、1985年にサンゴ礁の学術調査を支援する立場に関わりが始まりました。1992年には、WWFインターナショナル総裁の英国のエジンバラ公フィリップ殿下が白保を訪問し、サンゴ礁の保全を要請しています。これを機に「サンゴ礁保護研究センター」の建設計画が発表され、2000年4月にセンターが開設されました。WWFジャパンが建設資金確保のために行なった募金キャンペーンには、全国から多くの支援が寄せられました。

以来、石垣島白保地区で地域の皆さんと協力、連携したサンゴ礁の保全活動に取り組んできました。



しらはサンゴ村



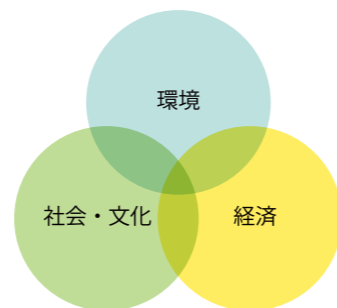
2. 「白保持続可能な地域づくりプロジェクト」の基本的な考え方

サンゴ礁の生物多様性の保全は、地域に暮らす人々が協働、連携して初めて実現することが可能です。石垣島白保のプロジェクトでは、より多くの人々に参加してもらうために、地域が直面している多様な課題をサンゴ礁の保全を通じて解決する方法を考えました。地域の暮らしに起因するサンゴ礁への環境負荷を低減する活動や、サンゴ礁の資源の持続可能な利用が地域の暮らしを豊かにする取り組みです。

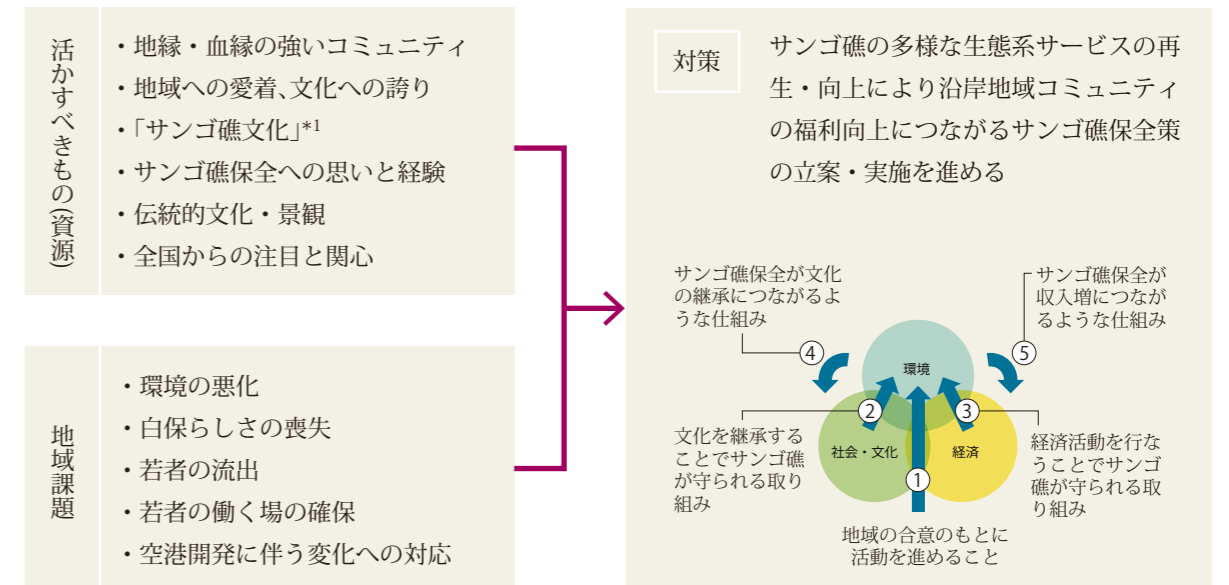
具体的には、地域が主体となったサンゴ礁保全体制を構築し、サンゴ礁の保全や活動が収益につながる事業（コミュニティビジネス）を立ち上げ、地域内で雇用を創出し、農業や漁業、観光業などの地域の産業の活性化を図るという考え方です。

◆多様な関心を持つ人々の参画を促すために

- 地域の抱える課題はサンゴ礁保全（環境）だけではありません。伝統文化の継承（社会・文化）や暮らしの向上（経済）などに関心を持つ人々が参加しやすい活動を考えました。
- 地域にとってWWFはよそ者です。地域づくりの意思決定はあくまでも地域コミュニティが主体です。活動を行なう際には、地域の内発性に配慮し、コミュニティの内部で合意が得られた場合のみ取り組みました。
- 地域の人々の暮らしとの関わりを大切にするためにサンゴ礁の恵み（生態系サービス）に着目し、多くの人がその恩恵を実感できるように取り組みました。



◆白保地区での取り組みの方針



*1 サンゴ礁文化…サンゴ礁の生物多様性に支えられたサンゴ礁のさまざまな恵みを利用した暮らしの中で育まれた文化のこと

◆地域で目指した3つの仕組み

I. サンゴ礁保全の仕組み	①サンゴ礁の多様な恵みに対応した多様な保全活動を企画・実行すること ②多様な関係者が参画出来るよう、活動は細分化するのではなく統合的・連続的に考えること ③結果としてサンゴ礁の保全につながるものは積極的に評価すること（外部の価値観を押し付けない）
II. 地域活性化の仕組み	①地域の課題を地域の人々が参加する活動を生み出すことにより解決すること ②地域らしさにこだわり、他にない唯一の取り組みを促すこと ③地域の自治能力を高め、地域の事務局となる機能を備えること
III. 持続可能性を高める仕組み	①地域の人々が集まり活動できる場や組織があること ②サンゴ礁の恵みが経済活動につながり、雇用を生み出すこと ③サンゴ礁の恵みを理解し、その保全に取り組む人を育てること

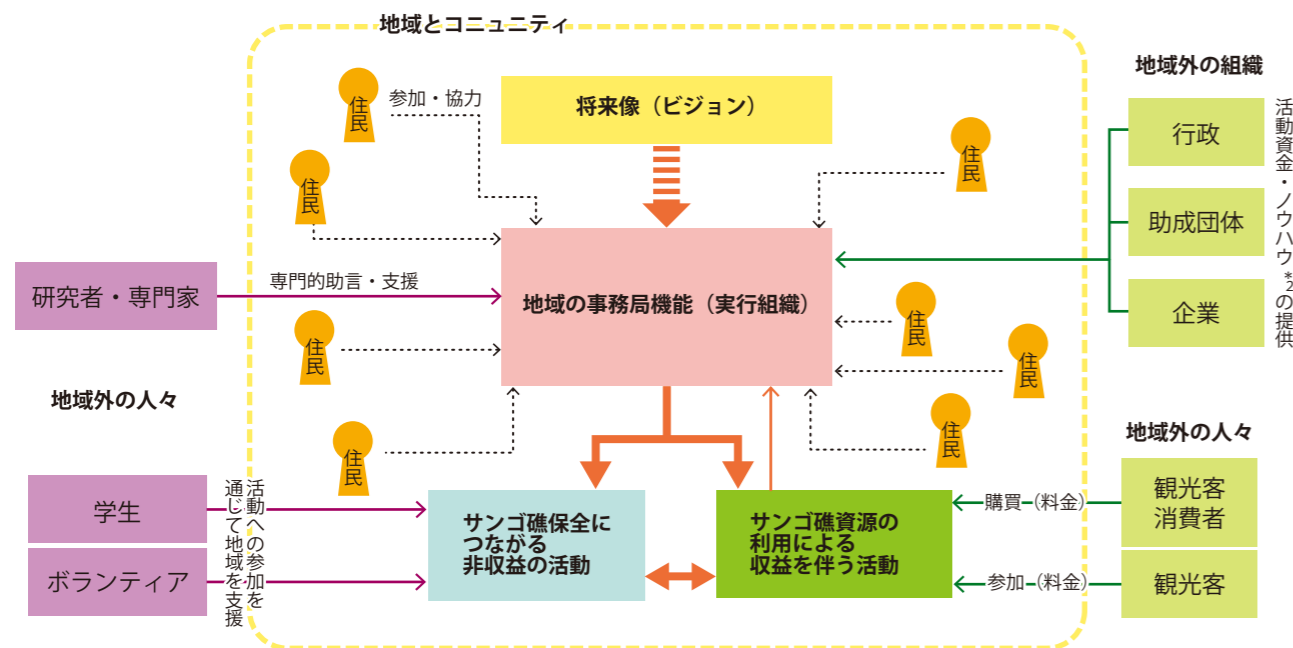
◆中間支援組織としてのWWFの活動

自然科学、社会科学の知識をベースとした地域コミュニティ内での人づくり、組織づくり、産業づくりに取り組みました。



◆目標とする地域のイメージ

- ・地域の自治が確立され、地域に暮らす生活者の視点から、身近な自然環境は自分たちの手で保全活用していくという考えが根付き、それが受け継がれていく地域コミュニティが目標です。
- ・若者の雇用を生み出す組織を事業が定着することを目指します。

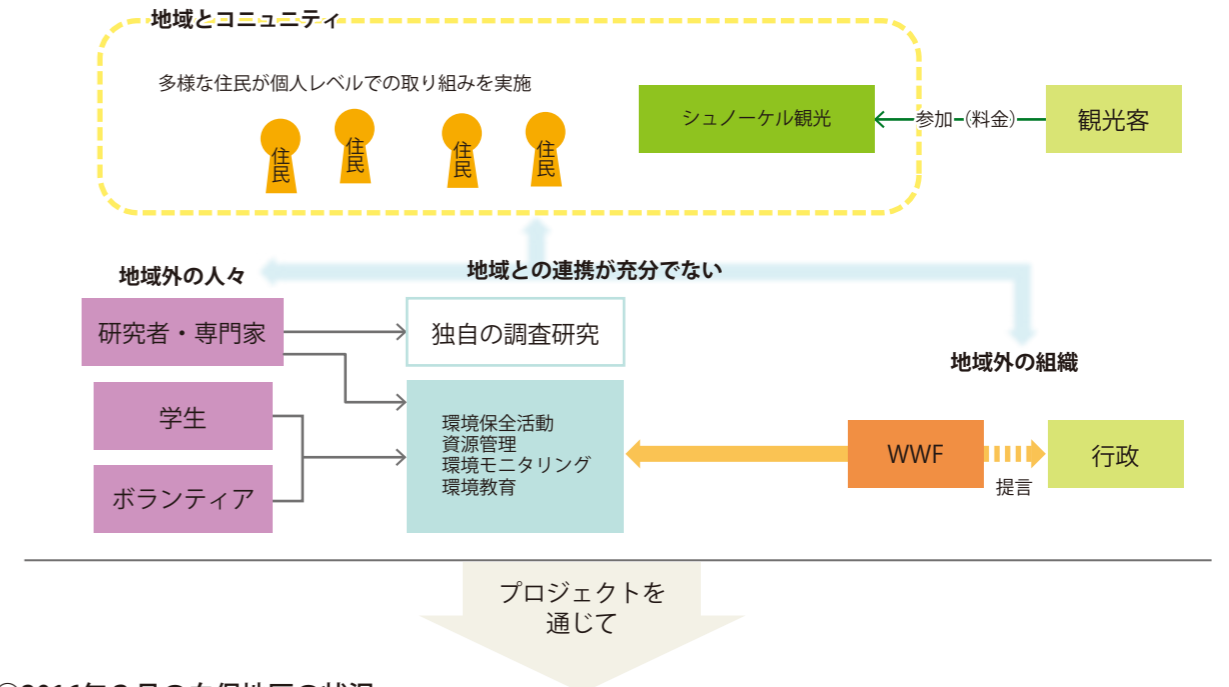


*2 ノウハウ…専門的な知識や技術、経験などの情報を指す

◆プロジェクトの進捗状況

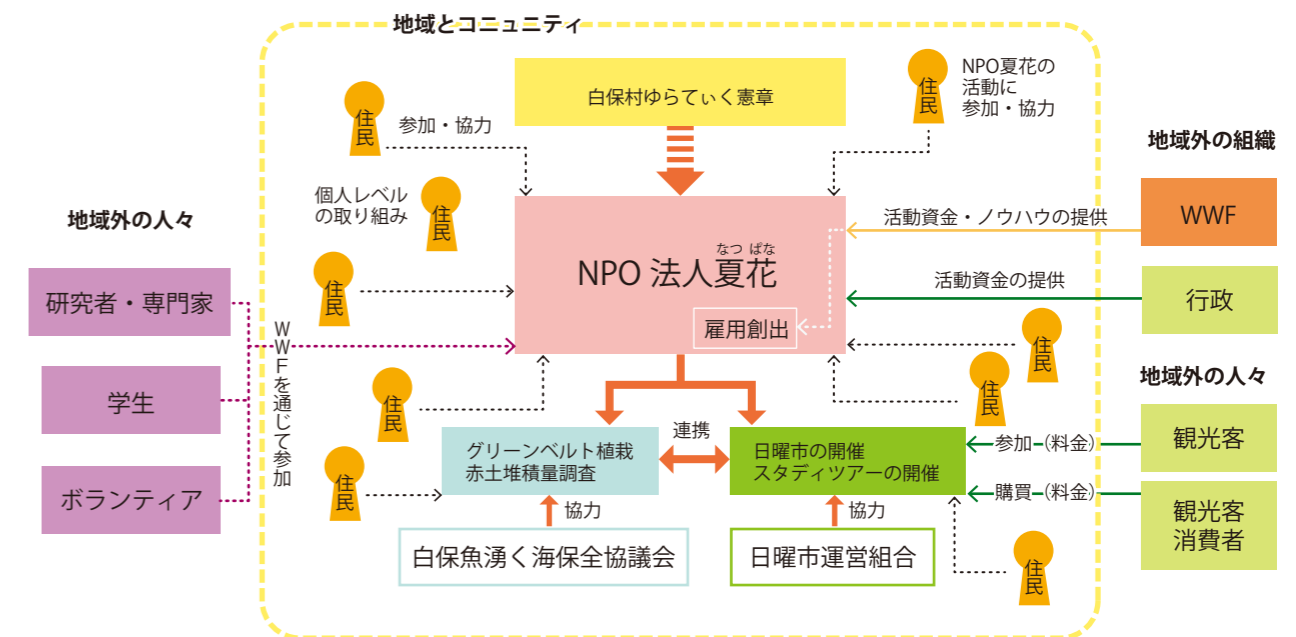
○2004年以前の白保地区の状況

WWFや外部専門家の活動と地域コミュニティの間の連携・協働が十分に行なわれていませんでした。



○2016年3月の白保地区の状況

NPO夏花が地域の事務局となり、さまざまな活動をコーディネートする体制が整いつつあります。



3. 白保地区の概要



石垣市字白保は、八重山諸島の主島である石垣島の東海岸に位置する地区です。

伝統的な農村ですが、潮時にあわせて海藻や貝、魚などのおかずをとり、海に下りる半農半漁の生活が営まれていました。人々はサンゴ礁の海を“魚湧く海”、“命継ぎの海”と形容し、飢饉の時も戦争の時も食糧を与えてくれる“宝の海”として大切にしてきました。第二次世界大戦が終わると白保の農民の中にも生業の中心を漁業に移す人々が現れました。宮古島や多良間島から訪れた多くの自由移民の一部には専業の漁民となる人たちもいました。その結果、1972年（昭和47年）の日本復帰までの間に農業と漁業の分業化が進んでいます。しかし、人々の多くは依然として農業を生業としながらも海の恵みを利用して暮らしてきました。

人々と海との関わりを大きく変化させたのは、1979年（昭和54年）に発表された白保東海域の埋め立てによる新石垣空港建設計画です。生活を守るための白保の運動が全国的な空港反対運動に拡大しました。1984年にはサンゴ礁の学術的調査が実施され、これを機に白保サンゴ礁の価値が世界的に注目されるようになっていきます。

この空港問題は20年以上に及び、その間、白保地区は賛成、反対で二分するという悲しい歴史を経験しています。2000年には、地元関係者の合議により白保の北部にあるカラ岳の南側陸上部が建設

白保地区は東京から約2000km、沖縄本島から約400km離れた八重山諸島の石垣島にあります。



予定地として選定されました。これにより、サンゴ礁の埋め立ては回避されました。しかし、農地からの赤土や農薬、生活排水や畜舎排水などの海域への流入、地球温暖化による水温上昇などがサンゴ礁の大きな脅威となっています。

2013年の新空港の開港は、白保地区に大きな変化をもたらせています。県外からの移住者や観光客の増加などです。現在、いかにサンゴ礁の海と伝統的な文化を守り、白保らしさを維持・継承していくかが白保の人々の関心事となっています。農家を含む幅広い住民の協働による地域のコミュニティーが一体となった村づくり活動が求められています。

【表】年別に見る白保での移住の変化

西暦	年号	石垣市を取り巻く状況	白保での出来事	移住者の状況	区分
1713	正徳3年		独立村となる	波照間島から約300人寄百姓	琉球時代
1771	明和18年	明和の大津波	1,546人が溺死、生存者28人(男21人、女7人)		
1773	安永2年	風旱害による大飢饉	高台に村を移す	波照間島から418人(男193人、女225人)を再移入	
1879	明治12年	琉球藩を廃し沖縄県を置		開拓に入った首里士族やその二世が、寄留	寄留時代
1903	明治36年	人頭税廃止		開拓のために本土、多良間から入植した人が寄留	
1908	明治41年	村を字に改める	八重山村字白保に		戦中
1914	大正3年	八重山村分村	大浜村字白保に		
1941	昭和16年	太平洋戦争勃発			
1944	昭和19年	米軍機による初めての空襲	白保飛行場（陸軍）建設作業開始	第506特設警備工兵隊(900名あまり)及び日本軍が駐留	自由移民
1945	昭和20年	8月終戦	1月～6月空襲・艦砲射撃があり	終戦後、宮古・多良間島からの自由移民が寄留	
1947	昭和22年	大浜村は町に	大浜町字白保に		空港問題
1964	昭和39年	石垣市・大浜町合併	石垣市字白保に		
1972	昭和47年	日本復帰			
1979	昭和54年	新石垣空港建設促進協議会、白保沖合埋め立てを決定	白保公民館総会全会一致で反対決議		移住ブームとタイタイン増加
1984	昭和59年	沖縄県、白保の環境調査開始	白保公民館が分裂		
1985	昭和60年	「平和をつくる沖縄百人委員会」白保サンゴ礁を調査	条件付き賛成派、白保第一公民館を結成	空港問題が全国に広がり、全国からの支援者が訪れる	
1992	平成4年		バブル崩壊		移住ブームとタイタイン増加
1994	平成6年		白保第一公民館解散		
1995	平成7年	阪神淡路大震災			
1999	平成11年	新石垣空港建設位置選定委員会開催			
2000	平成12年	新石垣空港カラ岳陸上案決定	WWF サンゴ礁保護研究センター開設		
2001	平成13年	NHK「ちゅらさん」放映		沖縄ブーム・移住の増加	
2004	平成16年		離島過疎地域ふるさとづくり支援事業	移住ブーム(2003年～2009年)	
2005	平成17年	新石垣空港設置許可	白保魚湧く海保全協議会設立 白保日曜市スタート		
2006	平成18年	緊急島民会議 新石垣空港着工	「白保村ゆらていく憲章」 公民館総会で制定	石垣市移住問題の顕在化	
2007	平成19年	石垣市風景づくり条例・計画制定	白保村ゆらていく憲章推進委員会設立		
2008	平成20年			白保市営団地(12戸)建設	
2009	平成21年	リーマンショック			
2011	平成23年	東日本大震災	東北の子供たちの受入		
2013	平成25年	新石垣空港開港	レンタカー乱立		
2014	平成26年	観光客が100万人を突破	過疎地区等自立再生対策事業	観光ブーム	

出典)「沖縄県石垣市白保地区における自然環境保全と地域づくりの仕組み」上村真仁、日本建築学会住宅系研究報告会論文集10

4. サンゴ礁生態系とサンゴ礁文化

白保地区の暮らしは、サンゴ礁の多様な恵み（生態系サービス^{*5}）に支えられています。こうした暮らしのことを地元では“サンゴ礁文化”と呼んでいます。豊かな農地は、サンゴ礁を由来とする土壌から出来ています。「魚湧く海」と呼ばれる海は、サンゴに共生する褐虫藻の光合成により多くの生物が養われているのです。

おじい、おばあが潮にあわせておかず捕りに通うイノー（礁池）では、海藻や貝、魚などを捕ることができます。地区を歩くと目につく石垣や木造家屋の柱を支える基礎、踏み石、井戸の囲いにはサンゴが使用されています。屋根の赤瓦を留める漆喰は、サンゴを焼いて作られていました。

白保の祭事や神事にも、サンゴ礁との関わりが色濃く見られます。御嶽や拝所に置かれた香炉には、ニンガイ（祈願）のたびに海から新しい白砂が入れます。人が亡くなった時は、海の水で清め送り出します。世果報（ゆがふ）といわれる幸せは、東の海から訪れます。一方で、災いや疫病、害虫などは海に流して遠ざけます。もちろん、サンゴ礁の海は、レジャーや楽しみの場でもあります。サニズ（旧暦3月3日）の浜下りには、多くの人々が海に出かけます。

井戸水は、雨水が琉球石灰岩によりろ過されたものです。ピー（前方礁原）は、天然の防波堤として、島を浸食から守っています。白保では、こうしたサンゴ礁の多様な恵みを楽しむだけでなく、一定期間海や山の資源利用を規制する海留（インドミ）、山留（ヤマドミ）の習慣や、伝統漁具の海垣（インカチ）など、資源を枯渇させない知恵と仕組みを持っていました。

^{*5} 生態系サービス…生物、生態系に由来し、人類の利益になる機能(サービス)のこと



イノー（礁池）とサンゴ礁文化のイラスト

5. サンゴ礁保全の担い手は誰か？

石垣島白保地区は、空港反対の際に漁業権の問題で注目されたために漁村のイメージがあります。しかし、沖縄の多くの島々がそうであるように（糸満などの漁村もありますが）伝統的な農村です。農業の合間に、生活の糧を得るために海に下りて、魚、海藻や貝などをとっていました。

白保のおばあたちに聞き取りをして得られた、「命継ぎの海」「宝の海」という言葉は、漁業者としての言葉ではなく、戦時中の空襲などで畑に出られなかったとき、干ばつなどで作物が得られなかったときでも海に下りれば何かしらの食べ物が手に入ったことへの感謝を表しています。

白保での保全活動を始める際に留意したのは、誰に保全活動に参画してもらうかということです。海的环境保全だから海に関わる人たちとの活動を思い浮かべますが、地域の中で漁業を専業で行っている人は非常に少なく、また、その多くが戦後に多良間島や宮古島から自由移民でこられた方々でした。

白保地区に暮らす多くの住民は、農家の方々でした。この方たちもまた、海の恵みを暮らしに取り入れており、白保のサンゴ礁は自分たちの海だという自負を持った方々です。新石垣空港建設に伴うサンゴ礁の埋め立てには、漁業者とともに農家も反対を唱えました。

更に、サンゴの劣化の要因の一つは、陸域から流れ込む赤土による影響です。赤土は主に農地から流れ出ています。その対策は、農家の協力が必要不可欠です。

環境リスクの原因や地域の社会構造の分析を通して、WWFでは、農家にとっても、漁業者にとっても大切な白保の海をともに守ろうというスタンスで、地域への働きかけをしました。それは、漁業者を守るために農家に規制をするというような地域の対立を煽るものではなく、地域の財産であるサンゴ礁の保全と活用について地域全体で考え、地域が協力して取り組もうというものでした。

白保魚湧く海保全協議会の設立の際に、漁業者やシュノーケル観光事業者に加えて、公民館長、老人会、婦人会、青年会、農業者、畜産農家などに声をかけ、地域みんなの海であることを確認し、自分たちの財産である地先のサンゴ礁を地域をあげて保全しましょう、と働きかけをしたのは、まさにこうした地域の状況があったからです。

6. 持続可能な地域づくりに必要な役割

地域のカタリスト（触媒）

カタリストとは、『まちづくり』の分野で、さまざまな利害関係者の協働を促す役割をカタリストと呼びます。カタリスト（Catalyst）とは、「触媒」という意味の英語です。地域の触媒として、「地域の人々の行動を呼び起こし」、「地域活動を促進させ」、「地域に大きな変化をもたらす」専門家のことを指します。

WWFは、地域のパートナーシップ（協力関係）の構築と地域コミュニティ（共同体）による実践活動の促進に携わってきました。その際に配慮してきたポイントが三つあります。

一つは、地域に学ぶという考え方です。長い歴史の中で受け継がれてきた自然や文化などの暮らしの知恵や技を見直し資源として活用することは、郷土への誇りや愛着を更に高めることにつながります。

二つ目は、多くの人々が参加しやすい活動を行なうことです。自分の参加した取り組みにより目に見える変化が起こると、参加者の効力感や、満足度が高まります。

三つ目は、カタリストが触媒と同じように変わらない姿勢でいることです。地域の中に活動が定着するには時間がかかります。専門家として地域の利害にとらわれず、ぶれずに目標に向かうよう働きかけ続けることが大切です。

地域を担うのはそこに暮らす人々です。あくまでも主役は地域です。しかし、地域には、さまざまな価値観の人がいます。それぞれ抱えている課題も異なります。持続可能な地域社会を実現するには多様な立場や意見を尊重しながら、地域にとって望ましい方向へ合意形成を促す役割が重要だといえるでしょう。

サンゴ礁保全と地域活性化の両立を促す役割を担う。地域の中で欠けている役割をサポートする。

第1段階「地域に入って、一緒にやってみる」

- ・地域内でのモデル的な取り組みを実施
- ・地域内、地域外との連携・ネットワーク化を支援

第2段階「自立的に取り組むための仕組みをつくる」

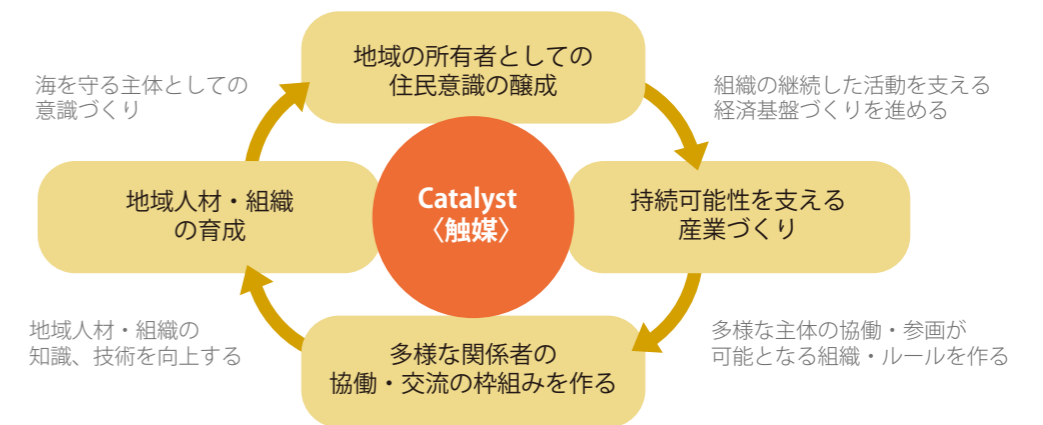
- ・組織、人材、資金などシステムの構築
- ・ワンサイクル回してみる（地域での経験の蓄積）

第3段階「地域に根付いた活動のフォローアップ」

- ・進捗確認（モニタリング）
- ・協働事業の創出（自立したパートナーとして）

レジデント型研究者としての WWF

石垣島白保でのプロジェクトは、協働のパートナーを白保集落の人々（地域コミュニティ）としました。それは、白保サンゴ礁と関わりの深い暮らしをしてきたのが白保集落の人々だったからです。空港問題を乗り越え、地域づくりをすすめるために、WWFは地域に定住している専門家（レジデント型研究者）の立場から地域の内発性を重視し、より多くの人々の参加を促すことに細心の注意を払いました。



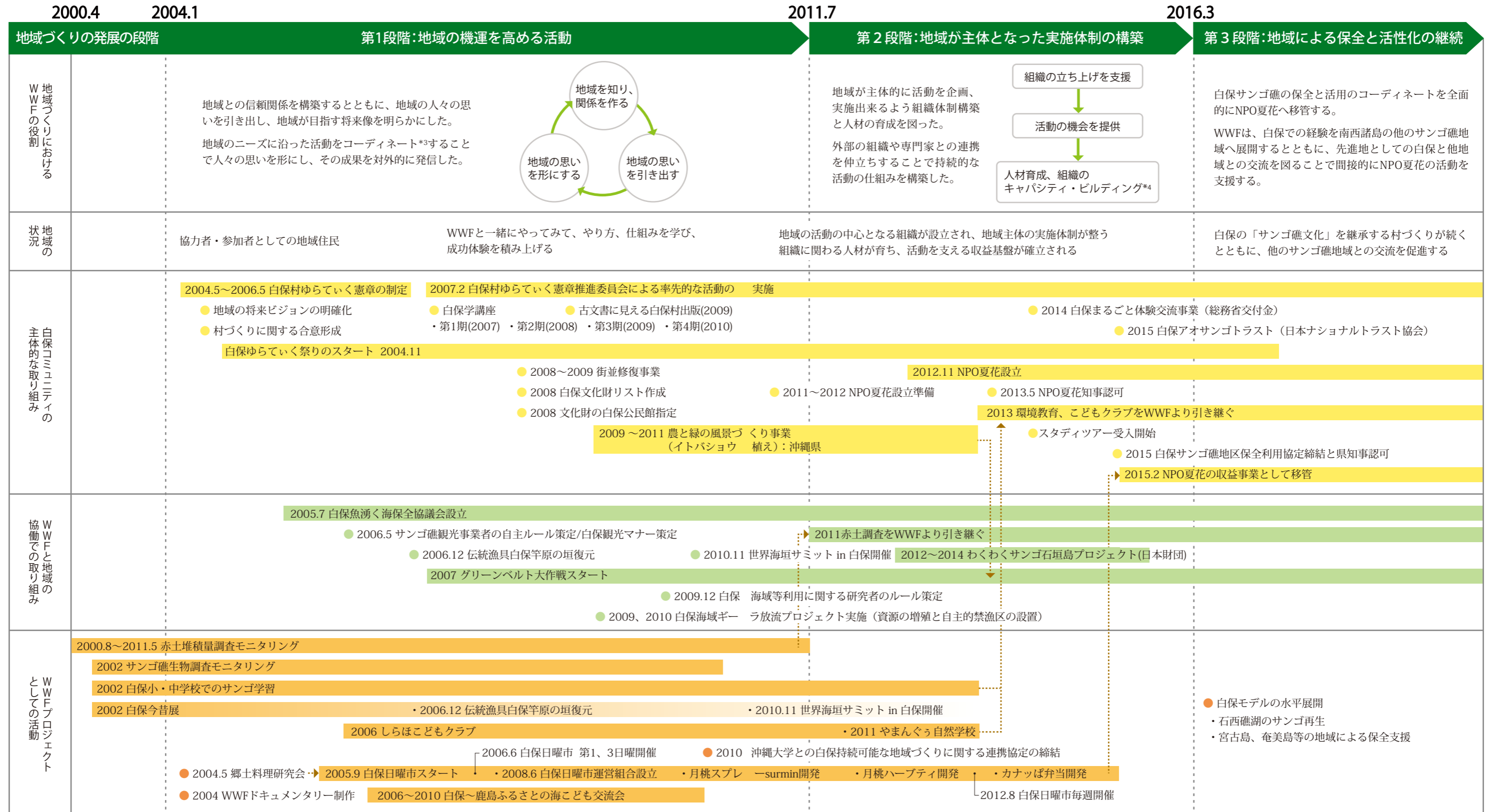
レジデント型研究者（研究機関）とは、「地域社会の中に定住して研究を行なう研究者を擁する大学、研究所などで、地域社会の課題に直結した領域融合型（トランスディシプリナリー）な研究を行ない問題に貢献することを、個人または機関の使命として明瞭に意識しているもの」と定義されています。つまり、地域に定住する研究者・専門家であると同時に、一人の市民・生活者でもあるという二面性を持つ人のことを指します。レジデント型研究者は地域の実情をよく理解し、地域住民の立場から問題解決に直結する領域融合的な研究を行ない、問題解決のためのアクションに携わることもあります。地域環境知を生み出すだけでなく、それを問題解決に活用して社会の変化を促す重要な主体なのです。

レジデント型研究者の機能

- ・グローバルな視野を持つ研究者としての専門知を提供
- ・訪問型研究者との協働を通じた多様な知識基盤の形成
- ・市民調査の設計と実施の中核として貢献
- ・ステークホルダーの一員として、住民と共同して科学的知識を活用
- ・生活者として地域の未来と自然環境に対する誇りと愛着を共有
- ・政策における意思決定に対する地域社会の一員としての貢献

出典：地域環境知プロジェクトHP <http://ilekcrp.org/summary/basic/resident/>

7. 白保持続可能な地域づくりの「これまで」と「これから」



*3 コーディネート…多様な関係者の利害や意見を調整して取りまとめること *4 キャパシティビルディング…目的達成のために必要な多様な力の習得・構築を支援すること

8. 実践事例編 白保コミュニティによる活動の詳細

石垣島白保地区におけるサンゴ礁保全に資する持続可能な地域づくりとして取り組んできた、活動の詳細を示しました。これまでのページで概念的に示してきたものについて、サンゴ礁保全から見たねらいやカタリストとして配慮した点、他の活動への波及効果と活動予算規模を示すことで、各地で類似の活動を行なう際に参考となる情報を整理しました。

なお、本資料で紹介する白保地域での活動は、WWFのプロジェクトとして実施したもの以外の白保コミュニティが主催した活動も含まれています。

これらのさまざまな地域の活動にもWWF職員が地域の一員として参加協力し、その専門的な知見や技術を生かしたものもあります。このため、各活動の紹介には、その主体と主たる活動財源についても記しています。

なお、前項に示した地域の内発性を重視するため、WWFの職員が地域住民として関わる際にも一貫してカタリストの立場からその取り組みに関わってきました。

実践事例1：白保今昔展 / DVD作成 (2004年)

実践事例2：白保村ゆらていく憲章の制定 (2004～2006年)

実践事例2-1：白保学講座 (2007～2010年)

実践事例2-2：ンマガミチ・カンヌミチの景観修復 (2008～2013年)

実践事例3：白保魚湧く海保全協議会 (2005年～現在)

実践事例3-1：サンゴ礁海面利用の自主ルール (2005年～現在)

実践事例3-2：伝統的定置漁具「海垣 (インカチ)」の修復と活用 (2006年～現在)

実践事例3-3：グリーンベルト大作戦 (2007年～現在)

実践事例3-4：ギーラ (シャコガイ) の放流による資源増殖 (2009～2010年)

実践事例3-5：地域住民の手による環境モニタリング体制の構築 (2000年～現在)

実践事例3-6：世界海垣サミットの開催 (2010年)

実践事例4：白保郷土料理研究会 (2004～2005年)

実践事例5：白保日曜市の開催 (2005年～現在)

実践事例6：しらほこどもクラブ (2006年～現在)、

ふるさとの海交流事業 (2006～2010年)

実践事例7：沖縄大学との連携とやまんぐうキャンプ (2010年～現在)

実践事例8：八重山の自然と暮らしの合同写真・ポスター展 (2012～2016年)

実践事例9：NPO夏花の設立及び自立支援 (2012年～現在)

実践事例1：白保今昔展 / DVDの作成 (2004年)

サンゴ礁の生態系を保全するためには、サンゴやその他の生き物の生息状況を正しく把握するとともに、それらの関わりや変化を定期的に観測する事が必要です。

WWFでは、センターの開設以前より、多くの研究者との連携、協働による白保サンゴ礁の環境調査を行ってきました。また、開設以降は、白保サンゴ礁の脅威の一つである赤土の堆積量調査を行ない、その対策の必要性を行政に提言してきました。

さらに、2002年より、こうした自然科学分野の調査に加えて、地域の暮らしとサンゴ礁との伝統的な関わりの中から、サンゴ礁資源の持続可能な利用の知恵を掘り起こし、地域の人々のサンゴ礁に対する誇りや愛着を次世代に受け継ぐことを目的とした聞き取り調査と、そのパネル展示を行なう「白保今昔展」に取り組んでいます。また、2004年には、「白保今昔展」の動画版として、WWFドキュメンタリー「海と生きる・サンゴ礁とともに～石垣島・白保～」を制作し、全国の図書館や希望する学校へ配布しています。このDVDの製作は、白保の暮らしとサンゴ礁の関わりを多くの人々に伝えることに加えて、WWFのスタッフが地域を知り、地域の多様な人々と関係を構築する一つのきっかけとなりました。

白保今昔展の取り組みを地域の人々に知ってもらうため、2004年4月に白保今昔展のパネル展示のオープン祝賀会を地域関係者を招き開催しています。



出来上がった映像には、WWFの会員でもある俳優の平田満さんにナレーションを入れていただきました



地元のおばあによる展示物の解説

サンゴ礁保全上の狙い	サンゴ礁の生態系サービスの豊かさを多くの人々に伝えるツールづくり。地域の人々に暮らしとサンゴ礁の関わりを再認識してもらう。
カタリストの関わり	出来るだけ多くの人々と接点を持ち、人間関係の構築を図る機会とした。
波及効果	海垣 (インカチ) に関する地域の人々の思い出を多く聞いたことが海垣の復元につながった。多様な資源利用を把握する郷土料理研究会のきっかけとなった。
実施主体	WWFのアクティビティとして実施
資金	(一財) 日本宝くじ協会 1,000万円 (2004年)

実践事例2：白保村ゆらていく憲章の制定（2004～2006年）



マップ作り

「海と緑と心をはぐくむ、おおらかな白保」

これは石垣島白保地区の村づくりの目標です。白保公民館は、この目標を掲げた「白保村ゆらていく憲章」を2006年5月の定期総会において制定しました。

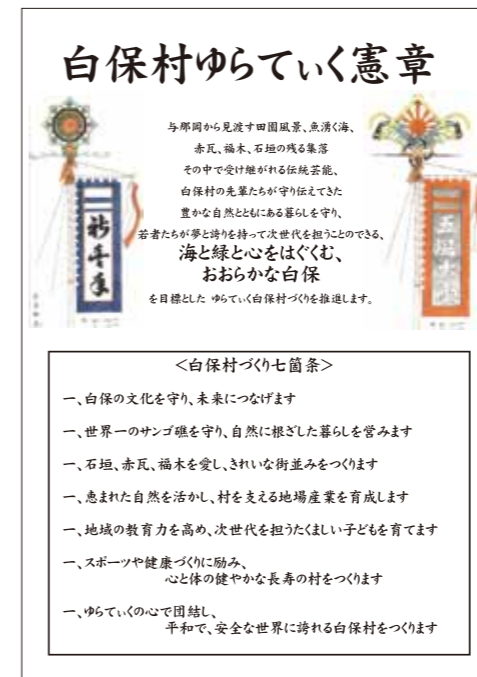
白保で憲章づくりが始まったのは2004年のことです。新石垣空港の白保カラ岳での建設の決定や移住ブームによる村の急速な変化に危機感が芽生えたためです。石垣市の事業を導入し、白保公民館が中心となり、多くの住民が実行委員となり事業を進めました。

白保公民館からの呼びかけに、WWFの職員も地域住民の一人として参加し、次世代プラン班として憲章づくりに取り組みました。

古老からの聞き取りや子どもたちとのまち歩きによる地域の宝物の掘り起こし、中学生以上の住民へのアンケート調査、多様な村人を対象とした座談会の開催など、出来る限り多くの白保の人々の意見が反映されるようにしました。また、石垣市事業で取りまとめた村づくり基本方針提案を原案と

し、2005年度には公民館の付託を受け次世代プラン班が中心となり憲章の検討を続きました。

その結果まとめられたのが、村づくりの目標と白保村づくり七箇条です。白保公民館では、憲章に基づく村づくりを促進させるために白保村ゆらていく憲章推進委員会を設置し、各種の村づくりに取り組んでいます。



〈白保村づくり七箇条〉

- 一、白保の文化を守り、未来につなげます
- 一、世界一のサンゴ礁を守り、自然に根ざした暮らしを営みます
- 一、石垣、赤瓦、福木を愛し、きれいな街並みをつくります
- 一、恵まれた自然を活かし、村を支える地場産業を育成します
- 一、地域の教育力を高め、次世代を担うたくましい子どもを育てます
- 一、スポーツや健康づくりに励み、心と体の健やかな長寿の村をつくります
- 一、ゆらていくの心で団結し、平和で、安全な世界に誇れる白保村をつくります

2004年 村の伝統や資源を守り、次世代に受け継ぐためのビジョンづくりをスタート

「ゆらていく白保村体験2004」次世代プラン班—全住民を対象にアンケート調査実施

2005年 公民館の付託により検討継続—座談会の開催、素案の策定

2006年 公民館総会で策定—将来像、村づくり七箇条、具体的な施策

2007年 白保自治公民館に、白保村ゆらていく憲章推進委員会設置

～現在 花城芳藏委員長以下20名で活動

サンゴ礁保全上の狙い	空港問題を乗り越え、地域住民が一つになり、村づくりを進めるためのビジョンを作ること。サンゴ礁保全の重要性について地域内で再確認し、村づくりの方針に位置づけること。
カタリストの関わり	あくまでも地域づくりの専門家、カタリスト（触媒）として関わること。白保の人々の議論や合意形成を支援し、白保地域の思いを形にすること。
波及効果	サンゴ礁保全が村づくり七箇条のひとつの柱として位置付けられたことで地域住民がサンゴ礁保全に取り組みするための大義名分ができた。
実施主体	白保公民館を中心とする地域住民による実行委員会
資金	平成16年度離島・過疎地域ふるさとづくり支援事業（石垣市事業として白保公民館及び白保関係者が実行委員会を組織して実施）300万円

実践事例2-1：白保学講座（2007～2010年）



地域の古老の案内で村の史跡をまわりその謂れを学ぶ（ビッチムリ：火番岡）

2007年、石垣市教育委員会の補助事業を導入し、「白保学講座」を開講しました。

この講座は、2006年度白保公民館総会において制定された「白保村ゆらていく憲章」に基づく村づくりの一環として開催したものです。白保地区に暮らす人々が団結し、村づくりを進めていくためのリーダーとなる人材を育成することが狙いです。

38名の受講生を集め全12回の講座を開きました。地域の古老を講師に迎え、白保集落の史跡巡りを行ない、年中行事の内容について学びました。村づくりの参考として、竹富島憲章とシマづくりについて、環境省による国立公園・海中公園法制度、WWFのモニタリング調査に基づく白保のサンゴ礁の現状についての学習なども行ないました。また、特別講義として石垣市市史編集課（当時）得能壽美氏による古文書の白保村に関わる全ての記述についての解説がありました。

大変盛況であったことから、2008年にも継続して開催をしました。この時は、51名の受講生を集めています。テーマは、「白保の魅力を再発見するとともに、自ら語り、伝えることの出来る地域

を養成する」としました。全11回の講座では、白保の古謡（アヨー）、ユンタ・ジラバ、プーリン（豊年祭）やソーリン（旧盆）の儀式やその意味について、シィサブムニ（白保方言）、伝統的な暮らしと産業など出来るだけ村人が自ら講師を務め学び合う形で運営を行ないました。

また、2010年には、ハウジングアンドコミュニティ財団の助成を受けて「白保の村おこしを考える」をテーマに、沖縄の離島や全国各地の村づくり、村おこし事例を学び、それからの白保の村づくりを考える講座を開講しています。同講座では久米島の視察研修を実施しました。

白保では、その時々課題に応じた地域での学習を続けています。



第1回目の白保学講座の開講式の様子



ゆらていく祭で披露したユンタ・ジラバ

サンゴ礁保全上の狙い	白保地区の多様な人々にサンゴについての学習機会を提供するために、白保村づくりリーダー養成講座の中で歴史や文化の学習と並んで白保サンゴ礁の現状や保全の必要性についての講義を実施した。
カタリストの関わり	村づくりに必要となる情報や知識を共有するために必要となるカリキュラムの提案。講座運営事務局として、開講準備、記録および成果のとりまとめ発信。
波及効果	白保に関わる古文書の学習内容を取りまとめた「古文書に見える白保村」の出版。白保の自然遺産や文化遺産を保全を保全継承するための白保公民館指定文化財の指定。NPO法人設立に向けた気運が高まった。
実施主体	白保村ゆらていく憲章推進委員会
資金	石垣市教育委員会成人学級 9万円（2007年年度） 石垣市教育委員会公民館学級 10万円（2008年年度） 自己資金 約40万円（書籍出版）（2009年度） ハウジングアンドコミュニティ財団 30万円（2010年）※NPO設立のための助成金のうち30万円を研修費用として活用

実践事例2-2：ンマガミチ・カンヌミチの景観修復（2008～2013年）



全長約170mに及ぶ白保小学校の石垣

白保地区は、風水に基づく広い敷地に福木の屋敷林とサンゴの石垣、赤瓦家の伝統的な佇まいの残る地区として知られています。青々と茂る福木の連なりを見て、「森の中にある村の様だ」と例えた人がいたそうです。しかし、台風常襲地であることから年々コンクリート造への建て替えが進み、防風林としての役目を終えた福木は徐々に少なくなっています。石垣もブロック塀に取って代わられました。

そんな中、白保村ゆらていく憲章推進委員会が呼びかけ、「ゆいまーる」によるまちなみ修景事業を始めました。2008年のことです。ンマガミチ（馬の道）、カンヌミチ（神の道）と呼ばれる地区の主要な道沿いの民家を対象に、伝統的なまちなみと調和した景観づくりを住民参加で進めるものです。ンマガミチでは、播種の神事「種子取祭」でカタバリ（競馬）が行なわれます。カンヌミチは、文字通り神司が通る神聖な道です。

当初、ブロック塀の緑化や福木の剪定を行なう予定でしたが、沿道の皆さんからブロック塀を撤去

し、石積みにしたいとの要望がありました。そこで、地区内にボランティアを呼びかけ、石工の棟梁の指導の下で、石積みを行なうこととしました。最初の2年間で延べ400人以上が参加し、民家11軒と白保公民館の石積みを行ないました。その後、3年をかけて白保小学校に約170mの石垣を積みました。

当初は人が集まるか不安でしたが、家主の同級生や親戚、かつての「ゆいまーる」のお返しに参加する人など、地域の絆は健在でした。また、多くの新規住民もともに汗を流しました。一人ひとりの力は小さいものですが、皆が協力することで、大きな成果を生み出すことが出来ました。

地域の活動を継続することが、「地域力」を更に高める好循環を生み出しています。



ゆいまーるによる石積み作業



子供たちも石積みに参加

サンゴ礁保全上の狙い	サンゴの石垣を再生することで地域の自然とともにある暮らしを見直すきっかけとしたいと考えた。また、無理、無駄と考えていたことでも、地域の人々が協働することで実現することができる、ということを多くの人々に実感してもらうために実施した。
カタリストの関わり	外部資金の獲得と実施体制の確立を行なった。 地域の多くの人々が参加しやすいように地区内への周知・呼びかけの実施、関係機関との調整、活動の記録、報告を行なった。
波及効果	ゆらていく憲章が広く知られるようになり協力者が拡大した。 目に見える地域の変化を実感したことで、地域づくりへの効力感を多くの人々が感じる事ができた。
実施主体	白保村ゆらていく憲章推進委員会
資金	ハウジングアンドコミュニティ財団助成金 90万円（2008年）、70万円（2009年）

実践事例3：白保魚湧く海保全協議会（2005年～現在）



定置網での収穫

赤土流出による白保サンゴ礁の劣化が、サンゴ礁を生活の場とする海人（漁業者）やシュノーケル観光事業者にとって大きな課題となっていました。しかし、赤土対策は農地で行なう必要があり、農家の協力なくしては進めることのできない難しい問題でもありました。

2005年4月、WWFでは、地域の人々の赤土問題への関心を喚起し、対策のための話し合いの場を持つために、「白保サンゴ礁の保全と利用に関する報告会」を開き2000年より年4回実施してきた赤土堆積量調査の結果を報告しました。報告の後で引き続き行なった話し合いの結果、地域の多様な関係者が参加し対策に向けた協議を行なう場を設けることになりました。

そうして、2か月の準備期間を経て設立されたのが「白保魚湧く海保全協議会」です。2005年7月の設立以来、白保公民館をはじめ、老人会、婦人会、青年会、畜産組合、農業者、エコツアー業者、民宿、シュノーケル観光事業者、海人が手を結び、サンゴ礁保全と地域の活性化に取り組んでいます。農家を含む地区の多様な関係者が参加することにより、白保サンゴ礁を地区総有の資産として地域

をあげて守ることが再確認されたことで地域をあげた保全活動への合意を得ることが出来たのです。

同協議会は2006年制定の白保村ゆらていく憲章に位置づけられ、2007年には白保公民館の傘下団体として地域コミュニティの公認する組織となっています。



理事会の様子



協議会を中心に海浜清掃も年に数回行なわれています

サンゴ礁保全上の狙い	空港問題でねじれた地区の人々とサンゴ礁との関わりを再生すること。空港の賛否を超えて村をあげたサンゴ礁保全に取り組む体制を作ること。
カタリストの関わり	白保地区内のより多くの人々が参加できる枠組みを提示する。事務局を担い、地域の合意形成を促す（設立準備～2012年度まで）。
波及効果	地域の認めた団体がWWFジャパンのカウンターパートとなったことで多様な活動が実施することができた。
実施主体	白保公民館、老人会、婦人会、白保ハーリー組合（漁業者など）、観光事業者、農家、小・中学校など地域内の多様な関係者による組織 WWFは助成団体、地域関連団体として一部事業を支援
資金	アクセンチュア（株）からの支援の一部を、WWFを通じて白保魚湧く海保全協議会に150万円（2006年度）

実践事例3-1：サンゴ礁海面利用の自主ルール（2005年～現在）



アオサンゴ群落でのシュノーケル



シュノーケル時の不注意でサンゴが傷む




研究者の報告会の様子

白保サンゴ礁を利用する「観光事業者」「レジャー利用者」「おかずとり・漁業者」「研究者」の4つのルール策定を目標に白保魚湧く海保全協議会で議論を進め、2016年3月時点で3つのルールを策定しています。

ひとつは、サンゴへの影響が懸念されていたシュノーケル観光のルールです。新規参入の抑制と将来的な総量規制を視野に入れた「サンゴ礁観光事業者の自主ルール」を2006年6月に制定しています。また、レジャーや観光客のルールとして、地区内での観光の心得をまとめた「白保村へお越しの皆さんへ」を2006年6月に取りまとめています。白保サンゴ礁は、空港問題のなかで注目され、学術調査が行なわれたことから、現在でも多くの研究者が調査、研究に訪れます。これらの調査研究で得られた情報を地域に還元してもらい、サンゴ礁の保全や村づくりに役立てるため「白保海域等利用に関する研究者のルール」を2009年12月に策定しました。本ルールは海の調査に限らず白保地区での社会・文化的調査などの陸域での調査・研究者にも遵守を求めています。

白保魚湧く海保全協議会 サンゴ礁観光事業者のルール

1. ルール策定の目的
本協議会は、白保サンゴ礁を今後とも大切に使いながら次の世代へ継承していくことを目的として、この海を利用する際のルールを関係者の総意によって定めるものとします。



◆基本的な考え方

- 白保サンゴ礁環境は、白保の人々が代々守り育んできたものであり、白保集落が豊かに暮らして行くために必要不可欠なものです。
- 白保の人々が伝統的に営んできた海産物の採取など海とつながる生活を将来にわたって続けるために、この海を白保集落の共有の財産であるとして、サンゴ礁環境の保全・管理を自ら行なうこととします。
- 観光、レジャー、漁業など白保の海を利用する全ての人たちが賛同、理解、協力しこの海を次世代へ継承していきます。
- 既存の法令や条例を遵守することはもとより、さらに一層の保全と適切な利用を進めるために自主的に守るべきルールを定め、これを守ります。
- 協議会が定めるこの海の保全・管理に関するルールを広く周知し、その徹底を図ります。


ゆらていく白保村 白保村へお越しの皆さんへ

石垣や赤瓦が残り、フアゴの様が美しい石垣島・白保集落。ここは古くからの農村集落であり「観光リゾート」ではありません。世界一のアオサンゴ群生で有名なサンゴ礁の海も「鑑定海水浴場」ではありません。

皆さんが白保に魅力を感じて遠くから来ていただいたことは、白保に暮らす私たちにとっても、とても嬉しいことです。しかし、その一方で、日々の暮らしを見ず知らずの多くの方が入ってこられることに不安を感じていることも事実です。

私たちの豊かな村の静かな暮らしを守るとともに、白保集落におこしいただいた皆さんに快適に気持ちよく滞在していただくために集落内でご注意いただきたいことをまとめました。

皆さんの白保での滞在がよい思い出になることを願います。



白保公民館
白保魚湧く海保全協議会

白保自治公民館・白保魚湧く海保全協議会
白保海域等利用に関する研究者のルール

■背景
白保は村人の暮らしの場であり、また村内で行われる神事や祭事などの精神的に重要な場所が多くあります。サンゴ礁の海は日々の暮らしの場は、精神的な場所ともなっています。近年、白保への訪問者が増加しており、船運の激しい移動や歩行者の多いサンゴ礁が足元を踏みつぶされるようになっています。

白保には全国から多くの学生や研究者の皆さんがサンゴ礁や観光、文化などに興味をもち、調査・研究に訪れています。白保の貴重な文化や自然の状況について専門家の皆さんに調査・研究していただくことは学術的な成果につながり、村にとって地域の発展を促すことにもつながるなど非常に重要なことであると考えています。しかし、地域へ還元される例はそれほど多くありません。

白保公民館では、白保村ゆかりの調査や研究を支援する研究者の皆さんに、地域に暮らしに貢献し、同時に調査・研究を進めていただくよう白保集落としてご挨拶させていただきたいと考えています。白保の村には、自然環境などの地域資源の持続的な管理が求められています。白保における村づくりの意図が明確になっており、科学的な調査をコミュニティが受け入れるための基本的な枠組みが整備されています。

■目的
本ルールは、調査・研究で白保を利用する研究者の皆さんに、地域に暮らしに貢献し、同時に調査・研究を進めていただくよう白保集落としてご挨拶させていただきたいと考えています。白保での調査を希望する学生や研究者の皆さんにとっては、白保集落内で実施された調査・研究の成果や関係者の意見を共有することができ、また、白保の村にとっては白保の文化や自然環境の保全・管理に調査・研究成果が役立てることが出来るなど、両者にとってメリットのある仕組みを構築することを目的としています。

■研究者の皆様にお願ひしたいこと
(1) フィールド調査に入る前の手続き
私たちは、白保集落内はちろんのこと地域を含めた地域内は白保の共有の財産であると捉えています。白保内での調査・研究を実施される場合は、白保公民館及び白保魚湧く海保全協議会に事前連絡をいただく必要があります。事前連絡は、調査の期間や日程やボランティアなど大規模なもの、悪天候などにより中止や変更を行う時と同様に)をして下さい。協議会に提出いただければ、白保公民館に連絡いたします。

白保公民館、白保魚湧く海保全協議会では、提出に基づき必要に応じて集落内関係者や地域に有用な調査や観光事業者などに対して調査・研究活動について周知し、円滑な実施に向けた調整・支援を行います。

提出内容：調査概要（テーマ、実施主体、目的、方法、期間、設置物などの関係、公開）

白保サンゴ礁に関わる3つのルール

サンゴ礁保全上の狙い	観光やレジャー、おかずとりなどの過剰利用を抑制し、サンゴ礁資源の持続可能な利用を進めること。地域の関係者が納得した形での海面利用を実現すること。
カタリストの関わり	利害関係者が納得できる落としどころを提示して、自主ルールに対する合意形成を図る
波及効果	シュノーケル事業者の自主ルールをもとに沖縄県知事との「白保サンゴ礁地区保全利用協定」を締結した(2015)。研究者へのルールに基づき、日本サンゴ礁学会との関係が深まり、調査成果の地域への還元などが進んでいる。
実施主体	白保魚湧く海保全協議会
資金	—

実践事例3-2：伝統的定置漁具「海垣（インカチ）」の復元と利用 (2006年～現在)



竿原の海垣（インカチ）

2006年に白保小学校、白保中学校の児童、生徒、PTA、そして白保魚湧く海保全協議会が協力し、伝統的な定置漁具「海垣（インカチ）」を復元しました。

「海垣」は、海岸の浅瀬に半円形に石垣を積み、潮の干満を利用して魚を捕る原始的な漁具です。白保では農家が自分の畑の近くの海岸に築き利用していたことから、半農半漁の時代の文化財だと言えます。戦前、白保には16基ありました。しかし、戦後、網が普及したこと、専業の漁業者が現れたことで使用されなくなりました。最後に残った海垣は昭和40年の始め頃まで使用されていたそうです。しかし、復元のための調査では、ほぼ跡形もなくなっていました。復元した「海垣」は、サニズ（旧暦3月3日）の浜下りや小学校、中学校の体験学習の場として使用されています。

「海垣」の復元は、人々の利用と海の環境との関わりについて新しい気づきをもたらしました。平坦な地形の沿岸に400mにもおよぶ石垣を構築したことで、環境の多様化による生物の増集効果が

確認されたのです。

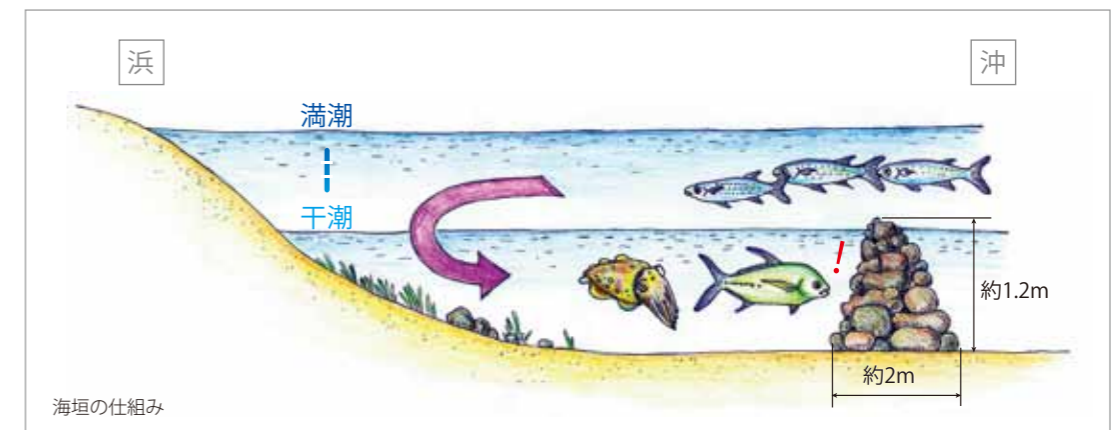
現在、「海垣」は白保地区の里海づくりのシンボルとして知られるようになってきました。



復元の様子



サニズ（浜下り）には、海垣で漁体験を実施



サンゴ礁保全上の狙い	白保今昔展の聞き取りの中で地域の高齢者の多くが、海との楽しい思い出として語っていた「海垣」を復元することで海と地域の人々が関わる場を作ること。農家が海を使用していた文化を見直すことで農家の海への関心を高めること。
カタリストの関わり	復元に必要となる各種の許可手続きの実施や関係機関（行政、漁協、環境団体等）との調整。環境影響に関するシュミレーションの実施、復元前後での環境調査の実施。
波及効果	類似の漁具を有する国内外の地域との交流が始まり、2010年には世界海垣サミット in 白保を開催。漁体験をした中学生の提案から農地へのグリーンベルト植栽活動がスタートした。
実施主体	白保魚湧く海保全協議会、WWF、白保小学校・白保中学校の児童生徒、PTA
資金	アクセンチュア（株）からの支援の一部を、WWFを通じて白保魚湧く海保全協議会に150万円（2006年度）※再掲

実践事例3-3：グリーンベルト大作戦（2007年～現在）



中学生による月桃植え

2007年よりWWFジャパンの支援のもとで、白保魚湧く海保全協議会が中心となり白保中学校と協力して、農地からの赤土流出防止を図るために畑の周囲に月桃（ゲットウ）などを植えるグリーンベルト大作戦を実施しています。

白保サンゴ礁の脅威のひとつである赤土対策は農家が営農活動の中でグリーンベルトを作ったり、緑肥植物でマルチングすることが求められていました。しかし、これらの対策は農家の手間が増えることに加え、グリーンベルトが畑の面積を狭め、農作業の邪魔になることなどから、あまり進んでいませんでした。

伝統的定置漁具「海垣（インカチ）」での漁体験を行なった白保の中学生が、「魚を増やすために自分たちのできる赤土対策を行ないたい」と発言したことをきっかけに、ボランティアでグリーンベルト植栽を行なう「グリーンベルト大作戦」をスタートさせました。

最初は、石垣市より月桃の苗の無償提供を受け、協力農家を捜し、白保中学校や白保小学校の児

童・生徒が環境教育やボランティアの一環として植え付けを行なう形でスタートしました。その後、住友生命からの支援を受けて苗を購入するとともに、植え付け後の水やりなどの管理作業も実施しました。また、月桃を原料とする商品開発を行ないグリーンベルトの経済価値の創出に取り組んでいます。2015年からは、協力農家の確保や、より持続的な対策の実施に向けて、サンゴ礁全体体験プログラムとして島外から石垣島を訪れる観光客に有償で植え付けを実施してもらう仕組みを立ち上げています。



赤土の流入により赤く染まった海



成長した畑の周囲のグリーンベルト（月桃）



月桃商品の販売によるサンゴ礁保全の仕組み

サンゴ礁保全上の狙い	農地からの赤土流出防止のためのグリーンベルトの植え付けをボランティア作業により実施することで農家の作業負担を軽減し、対策農地の拡大を図る。
カタリストの関わり	海の環境改善に取り組みたい中学生の希望を具体的な形にする。ボランティア希望者と対策農家のマッチングを行なう。地域内での継続した仕組みの構築をすすめる。
波及効果	グリーンベルト植物を原料とする商品開発につながった。サンゴ礁保全の体験プログラムとしてスタディツアーの目玉プログラムとなった。
実施主体	白保魚湧く海保全協議会、白保村ゆらていく憲章推進委員会、NPO夏花
資金	住友生命よりWWFを通じて500万円（2008～2014年）、沖縄県「ふるさと農村活性化基金」約30万円/年（2009～2011年）

実践事例3-4：ギーラ（シャコガイ）の放流による資源増殖（2009～2010年）



マイクロアトール上でのギーラの放流作業

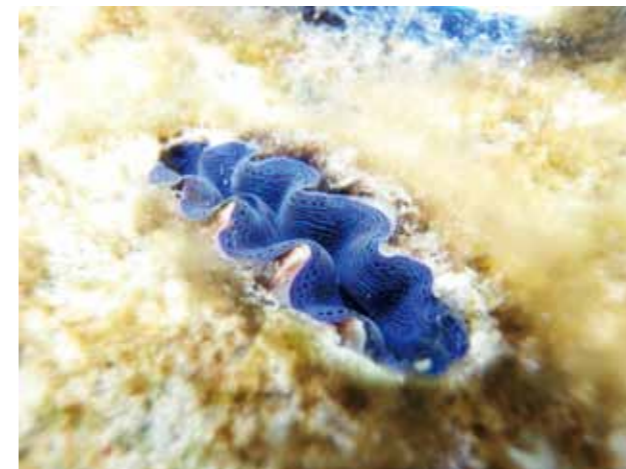
伝統的な海の恵みの代表として、多くの白保の人々に利用されてきたギーラ（シャコガイ）の資源の減少が問題になったことから、白保魚湧く海保全協議会が中心となり、沖縄県農水産業整備課の技術指導を受けて2009年、2010年にギーラの放流を実施しています。

白保海域でのギーラの資源増殖を目的としたもので、第2ポールと呼ばれる白保竿原のイノー（礁池）のハマサンゴのマイクロアトール上に、エアードリルやタガネを使い、穴をあけ、殻長約1cmの稚貝を埋め込み、モジ網で固定する手法を用いて、2年間で9,000個の稚貝を放流しました。放流したギーラは大きくなっても捕らずに親貝として残し産卵させ、周辺部での資源の回復を図ることにしました。いわば、地元漁業者による自主禁漁区の設置です。

放流したギーラの成長や残存率を調べるため毎年一度のモニタリング調査を実施するなど、この海域への協議会メンバーの関わりが深まっています。

2011年度以降には、観光プログラムとして観光客が放流し、大きくなって何度か産卵したものは、

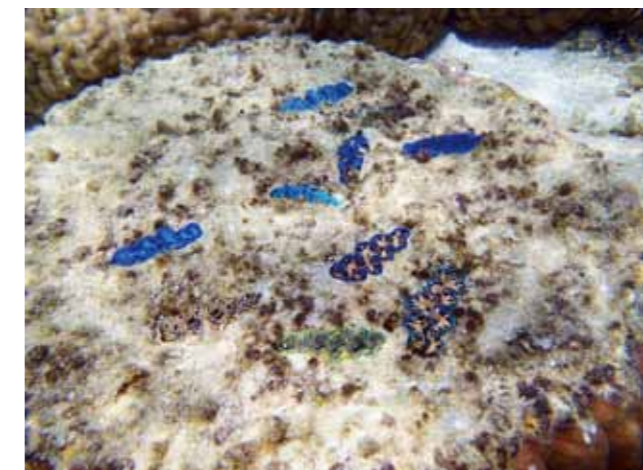
漁業者が漁獲し、地域内の食堂や民宿で食べることでできる仕組みを作る計画でした。しかし、沖縄県水産海洋センター・石垣支所での稚貝の生産が終了したことから地元産の稚貝の調達が出来なくなったことで、この計画は一時中断しています。



ギーラ（シャコガイ）



モニタリング調査の様子



順調に育っているギーラ

サンゴ礁保全上の狙い	地域住民に親しまれている漁業資源の増殖に取り組むことで、資源管理への関心を喚起する。漁業と観光の連携によるサンゴ礁の生態系サービスを活用した持続可能な地域の産業循環システムを構築する。
カタリストの関わり	ギーラの資源量の減少の共有と地域の人々の資源回復への思いを形にする。沖縄県水産海洋研究センターなどとの調整。地域内の多様な関係者の巻き込みを行なう。自主的禁漁区設置に関する話し合いの場を設置。
波及効果	放流海域が地元漁業者の自主禁漁区域となった。中学校による放流活動、モニタリングの実施につながっている。
実施主体	白保魚湧く海保全協議会、WWF
資金	WWF 10万円（2009～2010年）

実践事例3-5：地域住民の手による環境モニタリング体制の構築 (2000年～現在)



サンゴ礁の被度を測るモニタリング調査

WWFでは、自然科学的な情報と社会科学的な情報に基づく保全活動の実施を重視しており、研究者やボランティアとの協働により、各種のサンゴ礁関連の調査を実施してきました。

白保に職員が常駐するようになった2000年からは、地の利を生かして、詳細な調査活動をスタートさせています。当時、サンゴ礁保護の大きな課題となっていた農地から流れ出した赤土の礁池での堆積状況を把握するためのものです。年4回季節毎に調査を実施し、赤土の季節変動を分析するとともに、行政への赤土流出防止対策の提言を行なうなど、赤土問題の関心の喚起を図る重要な役割を果たしています。2002年には、赤土の堆積によるサンゴなどの生物への影響を評価するために、赤土堆積傾向の異なる海域でのサンゴの種構成や被度、底生々物、底質、魚類の生息状況に関する調査を開始しています。加えて、サンゴ礁と白保地区の暮らしの関わりについての聞き取りなどの社会学的な調査を実施しています。こうした調査により白保サンゴ礁の保全に必要なさまざまな知見を

得ることが出来ました。

白保地区でのサンゴ礁保全が動き出したことを受けて、2008年からは白保の人々が海の環境状況を把握するための「地域住民の手による環境モニタリング調査」の設計と実施体制の構築を目指した活動がスタートしました。その結果、WWFが実施してきた赤土堆積量調査を白保魚湧く海保全協議会のメンバーが受け継ぎ、協議会のメンバーで調査を実施するようになりました。2013年からは、調査のコーディネートをNPO夏花が行なう体制となり、調査結果を地域住民に周知するなど、地域住民の手による調査として定着しています。

今後、地元での調査メンバーと外部からの研究者との連携・協働が進み、地域での保全活動が促進することが期待されます。



赤土堆積量調査で海底の砂を採取する



小学校の授業での赤土堆積量分析

サンゴ礁保全上の狙い	地域の人々にとって研究は取っ付きにくい物であり、研究者の実施した調査結果を周知することは困難であったため、より多くの地域の人々に海の状況を共有してもらうことを目的として地域住民の手による調査の定着を目指した。
カタリストの関わり	協議会や白保学講座などの多様な地域との協働の中で、海に関わる地域の人々との接点を増やし、WWFの調査に参加してもらう機会を増やすとともに調査活動の移管を進めた。
波及効果	環境調査への参加を通して、マリレジャー事業者のサンゴ礁保全への関心が高まった。新たな協働調査の可能性が生まれている。
実施主体	WWF (2000～2011.9)、白保魚湧く海保全協議会 (2011.10～2012年)、NPO夏花 (2013年～)
資金	WWF (2000～2011年度)、日本アムウェイ 200万円 (2001年度) 石垣市 15～43万円/年 (2000～2010年度) 自然保護助成基金 100～300万円/年 (2000～2009年度) ソフトバンク(株) 750万円 (2007年度) 住友生命保険相互会社よりWWFを通じて 約40万円/年 (2012年度～2016.6)

実践事例3-6：世界海垣サミットの開催（2010年）



各国の参加者

2005年、白保の中学生が「海垣（インカチ）」と類似の漁具「石干見（イシヒビ）」の復元に取り組む大分県宇佐市の長洲中学校に手紙を書きました。この手紙が縁で、2008年、大分県宇佐市で「第1回日本石干見サミット」が開催されました。この国内の地域間の交流は、第2回には長崎県五島市で開催され、第3回の白保では世界サミットとなりました。

2010年10月に世界の12の地域が白保地区に集まった「世界海垣サミット」は、国内からは小浜島、宮古島（以上沖縄県）、長洲町（大分県）、富江町（長崎県）、奄美大島（鹿児島県）が参加しました。海外は、台湾、韓国、フィリピン、ミクロネシア・ヤップ島、フランス・オレロン島、スペイン・チピオナです。いずれも海垣と類似の漁具を持つ地域です。

サミットでは、石積み構造や所有形態、漁の仕方に加えて、管理の現状や課題を互いに紹介し合いました。また、文化財としての重要性や観光、環境教育の場としての活用、環境保全への貢献など今後の可能性について話し合いました。この成果として『世界海垣サミット・SATOUMI共同宣言』

が参加地域の代表者の署名をもって採択されています。共同宣言には、「海垣」をシンボルとし、参加地域が連携・協力しながら伝統的な人と海との関わりを受け継ぎ、沿岸域の暮らしと豊かな自然環境を維持するSATOUMIづくりに取り組むこと、「地域の海は、地域が守る」ことが盛り込まれています。

サミットとあわせて開催した公開シンポジウムでは、各地域の代表者と並び、白保中学校の生徒会が「海垣」の復元をきっかけとして始まった地域でのサンゴ礁保全活動について発表しました。

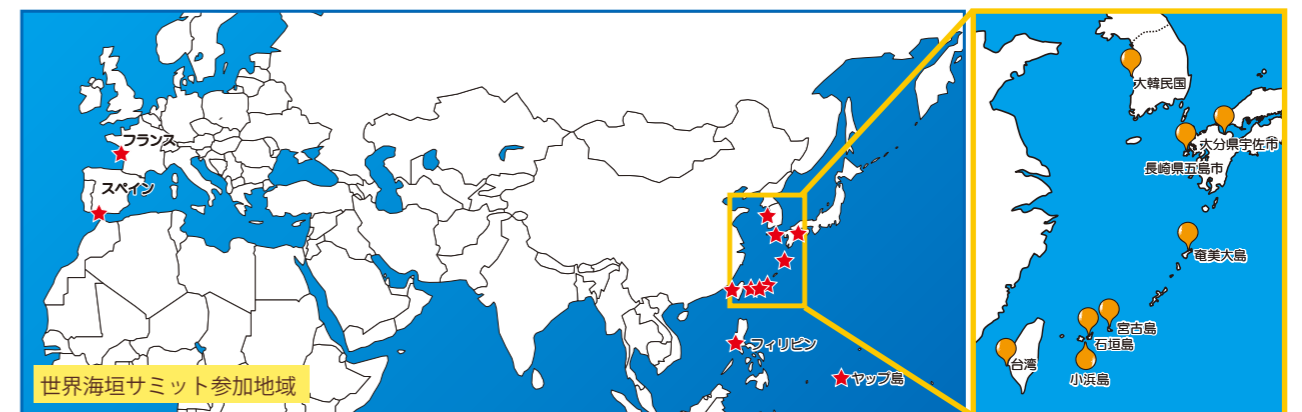
地域に向き合い、埋もれた資源（宝物）を掘り起こすことで、次世代を担う子供たちを巻き込んだの地域づくりが動き出し、世界と繋がっています。



宇佐市長洲で行なわれた第1回日本石干見サミットの様子



世界海垣サミットの様子



サンゴ礁保全上の狙い	伝統漁具の復元活用により沿岸の生物多様性の保全に取り組んでいる白保の活動を広く発信し、ほかの地域に展開するため。人手をかけることで沿岸の生物多様性の向上を図る里海の考え方を広めるため。
カタリストの関わり	海垣の類似の漁具を持つ地域の調査。国際シンポジウムの企画・運営。サミットの資金獲得と参加呼びかけ。
波及効果	奄美での日本サミットの開催。白保地域での里海づくりの理解の浸透。
実施主体	WWF、白保魚湧く海保全協議会
資金	住友生命保険相互会社よりWWFを通じて 200万円（2010年度）、 （独）国際交流基金 158万円（2010年度）

実践事例4：白保郷土料理研究会（2004～2005年）



白保の海岸でアースサをつむ

白保地域の人々のWWFとの協働によるサンゴ礁保全への関心を喚起するための最初の取り組みが、白保郷土料理研究会でした。2004年当時は、新石垣空港の環境アセスメントの最中であり、空港の賛成、反対で地域を二分した白保では、サンゴ礁保全のWWFの呼びかけに応えにくい状況でした。

そこで、地域の人々が参加しやすい郷土料理をテーマにすることで、地域の自然の恵みを利用する知恵の記録と継承、そして、WWFと地域との関係の構築を進めました。

研究会は、80代のおばあを中心に20名以上の白保住民が参加し、2か月に一度、身近な野菜や薬草などの食材の採取とそれらを使った調理実習という形で実施しました。

研究会で受け継いだ料理の多様性と自然利用の知恵をより広く知ってもらうために、その後、白保日曜市の開催や料理体験プログラム、日曜市弁当の開発などに生かされています。



石臼で大豆を引いて豆腐作り

試食の時間

マガリス

有数の伝統的お料理。パンサー、サツキ、イロチー、マツジシロイ等の野草・薬草を、味噌やニンニクなどでかき混ぜたもの。「まがリス」は生草という意味で、かき混ぜることを、「まが」の料理として、オースラヤ(漢字)やオースラヤ(漢字)の語に由来してお家に由来します。オースラヤ(漢字)の語に由来します。

材料になる植物は「北津波の野草が強い時期にいらすと生きた生命の強い野草」であるといふので、この野草のよさを生かすといふ趣いがあります。

冷凍して保存し、香ばしさをとって食べる事もできます。

野草・野菜料理

作った後はレシピも作成。祭りに使う料理などには、由来等も記載

サンゴ礁保全上の狙い	サンゴの保護を多角的にとらえ、WWFの活動に参加しやすい場をつくる。身近な自然の資源を利用してきた伝統的な郷土の食文化を見直すことで自然の価値を高める。サンゴ礁の恵みのさまざまな利用方法を掘り起こし、持続可能な利用による地域の活性化につなげる。
カタリストの関わり	地域の人々にとっては当たり前のものを、外部の視点で評価し、新たな価値を創造する。しっかりと記録にとどめて次世代へ継承する。
波及効果	WWFと継続して関わる多くの協力者を得ることができた。旧住民と新住民の交流の機会となった。地域の郷土料理や食材、民具、工芸品を直売する白保日曜市の開催につながった。
実施主体	WWF
資金	参加者会費制 4～5万円/年(2004～2005年度)

実践事例5：白保日曜市の開催（2005年～現在）



*
白保日曜市の様子

白保郷土料理研究会を通じて、白保には自然の恵みを利用したすばらしい郷土の食文化があることに気づき、これらを次世代に受け継ぐとともに広く知ってもらうことで、身近な自然の保護に繋がろうと、2005年に白保地区内に呼びかけ白保日曜市をスタートしました。郷土料理に加え、工芸品や民具、農水産品の生産者にも呼びかけ月1回で開催しました。出品の基準を白保在住者であり、白保の自然の素材を用いたものか、白保の伝統的な技によって製造されたものに限ることとし、白保の結束と地域づくりへの貢献にこだわり実施してきました。回を重ねるごとに出品者、来場者も増え、3年目に月2回の開催に、2012年には毎週の開催に拡大しています。

2013年に白保地区に新石垣空港が開港したことにより、観光客の立ち入りも増加しています。自然と共生した島の暮らしの中で生み出されてきた知恵や文化を見直し、受け継ぐ場として、消費を通じてサンゴ礁の保全に参加することのできる場となっています。

2014年4月にはNPO夏花の事業となり、2016年3月からはその売り上げの一部がサンゴ礁保全に

利用されるようになっていきます。



季節の野菜もずらりと並ぶ



夏休みには体験教室なども行なわれる。わらじ作り体験中



WWF が支援し、日曜市の商品として開発された島ハーブティ



2013年第1回八重山弁当グランプリ金賞を受賞した「カナっぱ弁当」

サンゴ礁保全上の狙い	サンゴ礁の生物多様性の保全と併せて、サンゴ礁文化と呼ばれる自然の恵みを上手に利用してきた暮らしの分かも保全継承する。身近な自然の素材を使った民具や郷土食が経済的な価値を持つことで、それらの自然を保全する。サンゴ礁と調和した持続可能な地場産業を育成する。
カタリストの関わり	市を開く場を提供するとともに、白保日曜市の目的や方向性、基準の設定などの企画。出品者の確保、会場準備、広報、会計など市全体の運営支援。
波及効果	白保日曜市をWWFからNPO夏花へ移管、地域の自主運営を実現した。サンゴ礁保全に貢献する商品の開発が進んだ。
実施主体	WWF (2004～2013年)、白保日曜市運営組合 (2014年～)、NPO夏花
資金	WWF 累計100万円 (2005～2008年度)、住友生命保険相互会社よりWWFを通じて 累計約350万円 (2009～2013年度) 自主運営 (2014年～)

**実践事例6：しらほどもクラブ(2006年～現在)、
ふるさとの海交流事業(2006～2010年)**



白保の海でシュノーケル体験

WWFでは、2000年のセンター開設以来、子供たちへの環境教育に取り組んできました。2003年度には環境省ジュニアパークレンジャー事業として、白保小学校5、6年生に対して年間を通じたサンゴ学習を行なっています。これをきっかけとして、毎年白保小学校の総合的な学習の時間を使ったサンゴレクチャーとシュノーケル体験を実施することが出来るようになりました。

WWFでは、サンゴや海、自然に関心を持った子供たちに、もっと多くの体験機会を提供するために、白保小5年生から中学校3年生までを対象とした「しらほどもクラブ」を結成しました。しらほどもクラブは、豊かな自然と、そこで育まれた暮らしの文化を体験することで「自然とのふれあいから感じる大切さに気付く」「昔の人の知恵を学び、考えることの素晴らしさを知る」「自然と文化を楽しみながら、皆とともに受け継ぐ」ことを目標にしています。講師は白保魚湧く海保全協議会のメンバーをはじめ、地域のおじいやおばあにお願いするようにし、地域への誇りと愛着が継承さ

れるようにしています。

また、2006年からの5年間は、WWFが地域とともに湿地保全に取り組む佐賀県鹿島市の「水の会」と連携し、それぞれの小中学生10人を派遣する「ふるさとの海交流会」も実施しています。



凧作りのため、竹ひごを作るところからスタート



有明海の干潟で湯リンピック体験

サンゴ礁保全上の狙い	白保の自然や文化の学習や体験活動を年間を通して実施することでふるさとの海への誇りと愛着を醸成し、次世代の地域の担い手を育成する。地域の大人が自然との関わりやその恵みを利用する知恵や技を子供たちに伝える場を作る。地域の指導者を育成する。
カタリストの関わり	地域人材の発掘と、その人材を講師とした学習、体験の場の設定。他地域との交流機会の設定。
波及効果	子供たちの交流事業の蓄積がエコツアープログラムを受け入れるベースとなった。子供との活動を通じて地域内の協力者が拡大した。
実施主体	WWF(2006～2012年)、NPO夏花(2013年～)、白保魚湧く海保全協議会
資金	WWF こどもクラブ 30万円/年(2006～2013年度)、 ふるさとの海交流事業 150万円/年(2006～2010年度) 住友生命保険相互会社よりWWFを通じてNPO夏花へ支援 30万/年(2014～2016年度)

実践事例7：沖縄大学との連携とやまぐう*6キャンプ（2010年～現在）



沖縄大学の学生と白保小中学生のやまぐうキャンプ

WWFでは、2010年8月、沖縄大学地域研究所との間で白保での持続可能な地域づくりに共同で取り組むための協定（「(公財)世界保護基金ジャパンと沖縄大学地域学研究所との連携に関する協定」）を締結しました。WWFがこの協定を地域研究所に働きかけたのは、「大学で有する専門家の知見と大学生の若さと行動力が、地域での活動を活性化するのではないか」、「地域での取り組みに大学生が関わることで次世代の保全活動を担う人材の育成が出来るのではないか」との期待があったからです。

沖縄大学とのさまざまな連携の中でも、大きな活動が「やまぐうキャンプ」です。沖縄大学の学生、スタッフの協力を得ることで、マンパワーの不足や経験値の不足を補い、自然体験キャンプが実施できるようになっています。その目的は、子供たちに島の自然を上手に活用しながら生きてきた先人の知恵、暮らしを体験してもらうことです。沖縄大学の学生とともに、子供達の体験活動をサポートすることで地域の若者の環境教育のコーディネータとしてのスキルが高まっています。

現在、白保地区では、こうしたキャンプの経験を生かしながら自然体験活動のプログラム化を図り

地域を挙げてエコツーリズムに取り組んでいます。エコツーリズムを農家や海人（ウミンチュ）の暮らしを豊かにする副業のひとつとすることで、島の活性化を図ることが目的です。環境教育が人を育て、地域の資源の価値を再発見させ、そのノウハウが地域にエコツーリズムを興し、地域活性化につながる。そうした循環に向けた第一歩が「やまぐうキャンプ」だと言えます。

*6 やまぐう…わんぱくという意味の白保方言



学生による集落散策プログラムの提案



学生による沖縄をテーマにした環境学習の実施

サンゴ礁保全上の狙い	地域主体のサンゴ礁保全を白保地区に定着させるために沖縄大学の教員の専門的なサポートと学生の参加による地域での共同の促進を図る。サンゴ礁をテーマとした環境教育、体験プログラムを開発する。
カタリストの関わり	地域と大学との連携・協働のマッチングを行なう。取組の方向性を提示し、持続性を担保する。
波及効果	大学生の参加、協力によりNPO活動が参加する地域の若者のモチベーションが向上している。小学生、中学生が大学生との交流を楽しみにし、こどもクラブへの入会が増加している。
実施主体	WWF
資金	住友生命保険相互会社 約30万円/年(2012～2015年度)

実践事例8：八重山の自然と暮らしの合同ポスター展 (2012～2016年)



アヤマハビル館での各団体の活動発表

八重山は、琉球列島の最南部に位置する12の有人島と20の無人島からなる自然度の高い島嶼地域です。これらの島々は、生物多様性に富み、固有種・固有亜種など、この地域にしかない生き物も多数生息しています。また、これら厳しくも豊かな自然の元で個性ある文化が花開き、自然とともにある暮らしの文化が息づいています。しかし、近年、地球温暖化や外来生物の侵入、近代化や都市化、ライフスタイルの変化などにより、豊かな自然と文化の保全、継承が難しくなっています。

そこで、改めて八重山の自然の豊かさ、暮らしと自然の関わりについて共に考える機会を持ちたい、と合同写真・ポスター展を開催することとなりました。この企画展は、八重山の島々の自然と暮らしの保全・継承に取り組む団体・グループ・個人が緩やかにつながり、それぞれの活動が活性化することで八重山の豊かな自然と共にある暮らしを次世代に受け継いでいくことを目的としました。

	開催場所	開催期間	出展数
第1期	しらほサンゴ村	2012/3～	12
第2期	アヤマハビル館	2012/12/12～2013/2/28	13
第3期	しらほサンゴ村	2013/3～	16
第4期	黒島ウミガメ研究所	2013/7/1～7/30	16
第5期	竹富島ゆがふ館	2013/9/1～9/30	16
第6期	西表島エコツアーリズムセンター	2013/10/7～11/5	18
第7期	環境省野生生物センター	2013/12/3～12/19	20
第8期	しらほサンゴ村	2014/3～	21
第9期	とぅもーるネット	2014/6/16～7/14	22
第10期	しらほサンゴ村	2015/3～	22
第11期	くばざきの港家	2015/6/1～6/30	22



サンゴウィークでの各団体・個人による活動発表



離島で行なわれたポスター巡回展の際には、その島の自然などを視察

サンゴ礁保全上の狙い	八重山の島々で類似の活動に取り組む団体が連携することでノウハウの共有などを図り、活動が促進する。
カタリストの関わり	各島々へ呼びかけ、協働する機会を提供する
波及効果	参加者相互の連携や協働が促進している
実施主体	WWF、八重山の自然と暮らしの合同写真・ポスター展実行委員会
資金	住友生命保険相互会社 30～50万円/年(2012～2015年度)

実践事例9：NPO夏花（なつぱな）の設立及び自立化支援（2012年～現在）



集落散策の様子

2012年11月、石垣島白保地区にNPO夏花（なつぱな）が誕生しました。「夏花」は白保の有志からなる村づくり団体で、沖縄県知事による特定非営利活動法人の認証を2013年5月に受けて活動をしています。

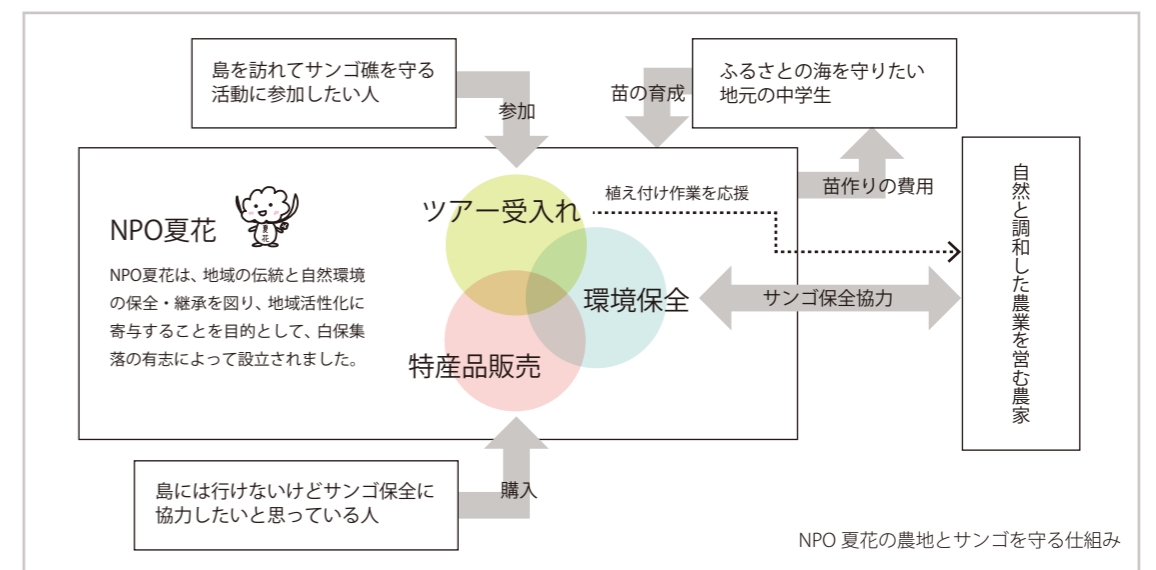
その定款には、地域住民の手によって、①石垣島白保集落を訪れる人々や地域の子供たちに対して、自然、文化体験や伝統的な自然資源を利用する知恵や技を伝える事業を行うことで、②郷土の文化や集落景観、農地、自然環境、人間関係などの白保らしさを維持・継承すること、③地域産業の活性化を図り、安心して暮らし続けることの出来る村づくりを進めることが目的として掲げられています。

そこには、村づくりを持続可能なものとするためには、事業性を持った活動が必要不可欠であるとの考えがあります。離島では、若者の多くが高校を卒業すると島を出ます。白保出身の若者が島に戻り、働ける場を創ることで地域を担う力になってもらいたいとの白保の人の思いが「夏花」に結実しました。

「白保魚湧く海保全協議会」や「白保日曜市」との連携・協働を通じた「夏花」の活動は、コミュニティ・ビジネス（CB）と位置付けられます。現在、全国に広がるCBは、地域の抱える課題を住民自らの手で地域の資源を活用し、ビジネスの手法で解決していくものです。「夏花」では、白保のサンゴ礁保全や集落景観の維持、生活文化の継承をツーリズムの導入により実施していきます。

島の長い歴史の中で育まれてきた自然や文化を守り、受け継ぐことは地域に暮らす人にしかできないことです。他には無い個性ある自然や文化は、地域への誇りや愛着を醸成し、都市部や海外の人たちをも魅了する貴重な資源となります。

「夏花」では、これまでに集落散策や自然体験、稼業体験など多様な資源を活用したプログラム開発を進めてきました。また、村の歴史や暮らしの成り立ちなどを理解し、石垣島を訪れる皆さんに、その魅力を伝えることのできる人材の育成も進めています。「夏花」の活動は自然や文化を次世代に継承する上でも大切なものだと考えています。



サンゴ礁保全上の狙い	WWFが担ってきたコーディネート機能を地域が持つことでサンゴ礁保全を持続可能なものとする。サンゴ礁保全につながる事業性を持った活動（産品開発、販売、エコツアーなど）を展開することで保全の取り組みを拡大する。
カタリストの関わり	地域でのNPO設立に向けた気運を高める（実践事例1～7の取り組み）。地域での多様な活動の中からNPO組織化を支援する。NPO収益事業の企画立案とその立ち上げの支援。サンゴ礁保全と関連づけた事業の立ち上げ支援
波及効果	地域の顔として各種取材やツアーを受け入れ窓口となることで、無秩序、過剰な利用を抑制、調整し、地域主導の受け入れが実現
実施主体	白保村ゆらていく憲章推進委員会、WWF
資金	住友生命保険相互会社よりWWFを通じて 240万円（2012年度）、350万円（2013年度）、600万円（2014年度）、640万円（2015年度） ハウジングアンドコミュニティ財団 100万円/年（2010～2011年度）

おわりに

WWFサンゴ礁保護研究センターは、地域主体のサンゴ礁保全のモデルを構築することを目的として2000年に開設した施設です。同センターでは、環境教育活動や環境モニタリングに取り組みながら、地域の人々が身近なサンゴ礁の生物多様性の保全に取り組むための手法を模索してきました。「開発」か「保護」かで地域を二分する辛い経験を経た白保の人々にとって、新石垣空港の着工する2006年までは「サンゴ礁保全」は複雑な意味を持ったものでした。空港反対運動を連想させるものだからです。

こうした地域の中でサンゴ礁保全に取り組むために、地域の伝統的な暮らしに学び、そして今を生きる人々と議論をしながらたどり着いたのが「持続的な地域づくり」です。

島に暮らす人々は、サンゴ礁を始めとする豊かな自然から多大な恩恵を受けてきました。現代の暮らしにおいても、サンゴ礁はマリレジャーの場や美しい景観資源として、多くの観光客を魅了し、地域の経済振興になくてはならないものとなっています。

島の自然と人々の暮らしには密接な関わりがあります。だからこそ、その保全や活動に際して、「そこに暮らしてきた」、また、「暮らし続けていく」人々の合意と参加が不可欠であると考えます。地域の暮らしの中で直面する課題を解決するためには、直接行動する地域の人々が考え、実行することが重要なのです。こうした内発性に加えて、持続的な地域づくりにとって重要なのは、自然資源の保全(環境)、地域文化の継承(精神・文化)や暮らしの向上(社会・経済)をバランスよく達成することだと言えるでしょう。

白保では、地域の伝統的な暮らしから学ぶこと、そして地域の多世代の人々が教えあい、学びあう中で地域の資源や島の暮らしの豊かさに気付き、再確認することを重視しながら保全活動と地域活性化の両立を進めてきました。本報告書が南西諸島やその他の地域の生物多様性の保全と生態系サービスを活用した個性ある地域づくりを進めるお役に立てれば幸いです。

WWF ジャパン 南西諸島生物多様性保全 CBM モデル

石垣島白保地区でのサンゴ礁保全に資する持続可能な地域づくりプロジェクト

ー 地域コミュニティとの連携・協働の記録 ー

編集者：WWF ジャパン 上村真仁

発行：公益財団法人 世界自然保護基金ジャパン
〒105-0015 東京都港区芝 3-1-14 日本生命赤羽橋ビル 6F
電話：03-3769-1711 FAX：03-3769-1717

サンゴ礁保護研究センター「しらほサンゴ村」
〒907-0242 沖縄県石垣市白保 118
電話：0980-84-4135 FAX：0980-86-8865

デザイン：WWF ジャパン 鈴木智子

写真：©WWF ジャパン / しらほサンゴ村
*印以外の写真は全てオリンパスのデジカメにより撮影

発行日：2016年8月

●本書掲載の文章、図表、写真などの無断転載はお断りいたします。
転載をご希望の方は必ず WWF ジャパンにご一報ください。

この報告書は住友生命保険相互会社のご支援を受けて作成しました。